文章と言葉と

芥川龍之介

文章

僕に「文章に凝りすぎる。さう凝るな」といふ友だちがある。僕は別段必要以上に文章に凝つた覚えはない。文章は何よりもはつきり書きたい。頭の中にあるものをはつきり文章に現したい。僕は只それだけを心がけてゐる。それだけでもペンを持つて見ると、滅多にすらすら行つたことはない。必ずごたごたした文章を書いてゐる。僕の文章上の苦心といふのは（もし苦心といひ得るとすれば）そこをはつきりさせるだけである。他人の文章に対する注文も僕自身に対するのと

同じことである。はつきりしない文章にはどうしても感心することは出来ない。少くとも好きになることは出来ない。つまり僕は文章上のアポロ主義を奉ずるものである。

僕は誰に何(なん)といはれても、方解石(はうかいせき)のやうにはつきりした、曖昧(あいまい)を許さぬ文章を書きたい。

言葉

五十年前(ぜん)の日本人は「神」といふ言葉を聞いた時、大抵(たいてい)髪をみづらに結(ゆ)ひ、首のまはりに勾玉(まがたま)をかけた男

女の姿を感じたものである。しかし今日（こんにち）の日本人は――少くとも今日の青年は大抵（たいてい）長ながと顋髯（あごひげ）をのばした西洋人を感じてゐるらしい。言葉は同じ「神」である。が、心に浮かぶ姿はこの位すでに変遷（へんせん）してゐる。

　なほ見たし花に明（あ）け行（ゆ）く神の顔（葛城山（かつらぎさん））

　僕はいつか小宮（こみや）さんとかういふ芭蕉（ばせを）の句を論じあつた。子規居士（しきこじ）の考へる所によれば、この句は諧謔（かいぎやく）を弄（ろう）したものである。僕もその説に異存はない。しかし小宮さんはどうしても荘厳な句だと主張してゐた。画力は五百年、書力は八百年に尽きるさうである。文章の力の尽きるのは何百年位かかるものであらう？

す。